

## 第 4 回

# 県立高等学校将来構想審議会

平成 2 0 年 1 2 月 2 4 日 (水曜日)

1 4 : 0 0 ~ 1 6 : 0 0

## 1 開 会

司会 本日は、本図愛実委員と猪股孝之委員から、所用のため欠席する旨のご連絡をいただいております。併せまして、菅野副会長と木村委員につきましては、若干遅れるということでのご連絡をいただいております。従いまして、現在のところ、16名の委員のご出席をいただいております。県立高等学校将来構想審議会条例第4条第2項の規定によりまして、過半数の委員がご出席いただいておりますので、本日の会議は成立しておりますことをご報告申し上げます。

次に、本日の会議資料でございますが、次第、その後に出席者名簿と座席表がついております。資料といたしましては、資料1から資料3までございまして、資料1につきましてはA4の1枚もの、資料2につきましてはA4判で17ページになっております。最後の資料3でございますが、これもA4判で14ページの資料になっております。資料につきまして、ご不足等ございませんでしょうか。

引き続きまして、マイクの使用方法についてのご説明を申し上げます。これまでと同様でございますが、委員の皆様の前にマイク装置がございます。ご発言の際には、マイクのスイッチをオンにいただきまして、マイクの手元にありますオレンジ色のランプが点灯しましたらご発言をお願いしたいと思います。併せまして、ご発言が終わりましたら、マイクのスイッチをオフにいただけますよう、よろしくお願いいたします。

それでは、ただいまから第4回県立高等学校将来構想審議会を開会いたします。

開会に当たりまして、宮城県教育委員会教育長小林伸一よりご挨拶を申し上げます。

小林教育長 一言ご挨拶を申し上げます。年末も迫りまして、各委員の皆様方にはご出席を賜りまして厚く御礼を申し上げます。

前回の審議会におきましては、これまでの議論を踏まえた次期構想の骨子の素案と先般実施いたしました高校教育に関する県民意識調査の調査内容について、各委員からさまざまなご意見、ご助言をいただきました。おかげさまをもちまして、先月、無事に意識調査を実施し、集計を終えることができたところであります。結果につきましては、後ほどご報告を申し上げますが、今後の高校教育のあり方をご検討いただくに当たり、大いに参考になりそうなデータが出てきているのではないかと考えております。

本日は、こうした県民意識調査の結果も踏まえながら、これから本県の高校教育に求められる具体的な学校・学科のあり方等につきましてご審議をいただくことにしております。

折しも一昨日、高校の学習指導要領の改訂案が文部科学省から公表されましたが、本年3月

の小中学校の学習指導要領改訂案と同様に、新しい教育基本法の理念を踏まえて、具体的には理数教育の充実、伝統や文化に関する教育の充実、人間としてのあり方・生き方教育の充実、さらには職業に関する教科・科目の改善等々の決定が示されたわけであります。こうしたことも踏まえまして、皆様方には忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

司会 本日の会議の出席委員につきましては、お手元の出席者名簿及び座席表でかえさせていただきます。よろしくお願いいたします。

## 2 議 事

### (1) 高校教育に関する県民意識調査の集計結果について

司会 それでは、早速でございますが、これより先は荒井会長に進行をお願いしたいと思います。会長、よろしくお願いいたします。

荒井会長 それでは、早速議事に入らせていただきます。

本日は、会議時間の前半3分の1程度を使いまして議事(1)、残りの時間で議事(2)について協議をしていただきたいと思いますと考えております。円滑な議事進行にご協力くださるようお願い申し上げます。

それでは、議事(1)に入りたいと思います。

前回の審議会で協議いたしました県民意識調査、今教育長からもお話しございましたが、その集計結果がまとまったようでございますので、本日はまずこの集計結果について事務局から説明をお願いしたいと思います。

安住室長 では、資料1の「高校教育に関する意識調査」について、資料2になりますけれども、その集計結果についてご説明いたします。

初めに、資料1の「高校教育に関する意識調査」についてご説明申し上げます。

対象につきましては、前回もご説明しておりましたが、中学2年生と高校2年生及びその保護者、また一般県民と中学校の進路指導主事ということで、計9,543名を対象に行っております。

回収率でございますが、全体の回収率は70.1%になっております。各学校を通じて行いました学校関係につきましては高い回収率になっておりますけれども、一般県民につきましては30%という回収率でございました。

次に、集計結果についてご説明させていただきます。

設問の1から6までにつきましては、回答者の属性に関するものでございます。特徴的なことだけ申し上げますと、まず1の年齢でございますけれども、今回、中学校と高校生の保護者が入っているということで、40歳代が半数を超えております。もう一点でございますが、20代の方の回収率が悪かったということでございます。

次に、性別でございますが、これにつきましては、中学校の保護者につきましては回答者の8割が母親ということで、全体的に見ますと男性が3分の1、女性が3分の2というような構成でございました。以上が属性的の特徴的なことでございます。

次に、回答内容に入らせていただきます。2ページをお開きいただきたいと思います。

設問7につきましては、「高校への進学に当たりまして、最も重視することを二つ選んでください」という設問でございました。結果から申し上げますと、子ども本人の学力と、卒業後の進学や就職の問題に大きく分かれております。各対象別に見ますと、県民を除いた中2、高2、中学校の保護者、高校の保護者では、子どもの学力を最も重視するというのが一番高く、次いで高校卒業生の進学や就職という順番になっております。

また、中学生でございますけれども、部活動や学校生活の充実というのも他に比べて高い結果になっております。

設問8でございますが、これにつきましては毎日の通学の許容時間を問うものでございます。

片道30分以内と片道1時間以内を合わせました1時間以内というのが合計で84.9%を占めているということでございます。片道1時間半まで入れますと97.2%ということで、ほとんどの方が1時間半以内に入っております。特に高校2年生と保護者につきましては、片道30分以内というのが5割を占めております。ですから、1時間程度が大方の通学の許容範囲と見てよろしいかと思っております。

次のページでございますが、これは地区別に見たものでございます。上が中学生及びその保護者、下が高校生と保護者になっておりますけれども、下の高校生及びその保護者について見ますと、仙塩地区が通学時間に長い時間を要していることが見られます。これは、仙塩地区から仙台市内に通っている人が多いということで、このような結果が出ているのかと思っております。次に、栗原と登米地区でございますけれども、通学が長くなっているのかなと考えておりましたけれども、バイクや送り迎えが多いためか、片道30分以内というのが7割を超えております。全体的としては、仙南、仙塩、石巻地区が2時間以上の者が少し多く、遠距離通学をしているという結果です。

次に、4ページでございます。設問は、「お子さんについて、どの段階までの進学を考えますか」でございます。各対象におきまして、短大・大学までが最も多く、全体で47.7%になっておりまして、大学院まで入れると大体50%になります。本県は、大学進学希望者自体が余り高くないと言われてきましたが、この数字からも、余り高いとは言えないかなと見ております。特に中学2年生の数字が41.7%という低い数字が見られます。

その下の矢印ですが、これは、高校生とその保護者について学科別に見たものでございます。普通科、専門学科、総合学科、定時制・通信制に分けてありますが、普通科では短大・大学が多く、それ以外の学科につきましては、高校までというのが多いという傾向になっております。

その下につきましては、地区別に見たものでございまして、短大・大学への進学の希望を見てみますと、50%を超えているのが仙台市のみで、58.2%になっております。最も低いのが登米地区で28.1%ですが、地区によっても差があるように見ております。

次のページでございますが、進学の希望につきまして、世帯主の業種の区分で見たものでございます。同じように短大・大学までの進学の希望を見ますと、50%を超えているのが、運輸・通信を除いた第三次産業でございます。それから、短大・大学までの進学希望が低いところについては、専門学校への進学希望が高いという傾向が見られます。

設問の10-1でございますけれども、進学希望の理由についての回答であります。下の中学生・高校生の回答を見てみますと、高専以上のところを選んだ理由としては、自分が望んでいる知識の習得や職業に就くために5割から7割になっております。次に、の高校までを選んだ場合につきましては、勉強を続けるよりも早く社会に出たいからというのが1番でございます。次いで家計の状況から見て高校までが適当だからと答えた子どもが、大体2割いるという状況でございます。

次のページの10-2につきましては、保護者並びに県民、大人に聞いた進学希望の理由についての回答でございます。下の方を見ていただきたいのですが、高校までと選んだ家庭につきましては、子どもの希望というのが40%、次いで我が家の家計を考えてというのが32.3%ということになっております。高専以上につきましては、子どもの将来の就職を考えてというのが一番多いという状況が見られます。

次に、設問11でございます。高校に進学したとする場合、どの学科に進学したい、または進学させたいですかという問いでございます。全体で見ますと、普通科が一番高く、次いで職業系の専門学科、その次が総合学科、次に普通系の専門学科という順番になっており

ます。総合学科につきましては、県民と中学生の保護者の割合が職業系の専門学科よりも高くなっております。

その下の小さな表ですけれども、これは、高校生とその保護者につきまして、現在属している学科を踏まえながら、今選ぶとすればどの学科を選びますかという形の問いでございます。大体、現在属している学科の選択が多いのですが、高2の総合学科に属している子どもにつきましては、全体で79名でございますけれども、普通科を選びたいというのと総合学科を選びたいというのに分かれており、総合学科に進学させたいという希望が多いにもかかわらず、総合学科に通学する子どもからすると意見が割れているという状況でございます。

次に、設問12でございます。これにつきましては、設問11におきまして職業系並びに普通系の専門学科を選択した人に、より詳細な専門学科の希望を聞いたものでございます。結論から申し上げますと、工業に関する学科を希望するというのが33.5%と、全体の3分の1を超える高い結果が出ております。次いで、全体では商業になっておりますけれども、これを各対象別に見ますと、中学校の子どもたちにとっては、音楽・芸術に関する学科に入りたい、中学校の保護者では商業、県民では情報系の学科、福祉系の学科というところにも回答が見られます。

設問13でございますけれども、今までの設問を踏まえまして、これからどの学科の割合を増やしたらいいですかという設問でございます。最も多かったのは、総合学科でありました。2番目につきましては、中学生の保護者と中学校の進路指導主事につきましては普通科が高くなっております。高校生の保護者と県民につきましては、職業系の専門学科を増やすべきだという形になっております。

次に、中高一貫校の増設について聞いたものでございます。まだ県内に公立2校の設置ということがあるかもしれませんが、どちらともいえないが、28.5%と最も多くなっており、次いで増やす必要を感じないになっております。特に進路指導主事の意見として、増やす必要を感じないというのが57.8%と高い割合になっております。

中高一貫を形態別に見ますと、一番高いのが、連携型で、併設型が一番低くなっております。

その下の小さい表につきましては、これを各地区別に見たものでございます。現在、大崎地区に併設型、気仙沼・本吉地区に連携型の中高一貫校をそれぞれ1校ずつ設置しておりますが、その大崎と気仙沼地区を見ますと、全体的に地区の中では大きな傾向は見られないように思いますが、必要を感じないというところにつきましては、大崎の地区は若干ですけれど

も高くなっているのが見られます。気仙沼・本吉地区につきましては、 どちらともいえないというのが一番高くなっております。

次に、設問15でございますが、ここは体験活動並びにインターンシップについて聞いたものでございます。15-1は、中学生、高校生に企業への体験活動等について聞いていますが、中学生、高校生とも ぜひ受けてみたい、 受けてみたいというのを合わせると6割を超えておりますので、職業体験とか企業の見学を希望しているということが見られます。

15-2は、普通高校へのインターンシップ等のことについて伺ったものでございます。職業系の専門学校と同様に、 全ての普通科高校においても取り組むべきであるというのが最も高くなっております、50.4%でございます。普通科の中で就職を希望する者を対象にすべきだというのが34.8%でありまして、 で85%くらいになっております。

次に、設問16でございますが、ここでは、入試制度に関して聞いておりますが、現在、入試制度につきましては、入学者選抜審議会において検討が始まっておりまして、現在行われております推薦入試、一般入試、第二次募集の3回についてどう思うかという設問でございます。結果としましては、進路指導主事を除く各対象におきまして、現在の3回入試を望んでいるという傾向が見られます。進路指導主事につきましては、推薦入試を除いた2回入試でよいと回答しているのが74.5%になっております。

設問17でございますが、これは地域と高校との連携についてお伺いしたものでございます。一番高いのは、どの対象においても 県立高校については地域への情報発信・情報開示をもっとすべきであるになっております。

次に、設問の18から23までにつきましては、現行の将来構想の取り組みについての評価を聞いております。18から20までにつきましては、魅力ある高校づくりの一環としまして中高一貫校、総合学科、昼夜間開講型の定時制高校に関して聞いております。

まず、設問18の中高一貫校の取り組みについてでございますが、 どちらともいえない、 わからないを合わせると5割を超えております。 の合計の評価する回答と、 の合計の評価しない回答を比べた場合、全体で評価する回答の割合の方が上回っておりますけれども、進路指導の先生につきましては、若干でございますけれども、その考えが逆転しております。

次に、設問19でございます。これについては総合学科設置についての評価を伺ったものでございますが、 とても評価する、 評価するの合計が6割を超えております。逆に あまり評価しない、 評価しないで大体5%でございますので、評価する回答の方が大きく上回っているところでございます。ただし、進路指導主事を見ると、 余り評価しないという割合も結

構高くなっております。

設問20につきましては、昼夜間開講型定時制高校の設置についての評価を伺ったものでございますが、これにつきましても の合計が6割を超えておりまして、 の合計が約5%ということで、評価する回答の方が上回っているという状況でございます。

以上のことから、魅力ある高校づくりという観点から、総合学科、昼夜間開講型定時制につきましては、高い評価をいただいておりますけれども、中高一貫校については、まだどちらともいえないという方が多く、評価が定まっていないように考えております。

次の設問21でございますが、これにつきましては生徒減少に伴う高校の再編・統合についてでございます。 ととも評価する、 評価するの合計が31%で、 あまり評価しない、 評価しないの合計が、13%ということになっておりまして、評価する回答が上回っているという状況でございます。ただ、 どちらともいえないというのが最も高い割合になっており、取り組み自体は評価していただいているわけでございますけれども、どちらともいえないという方も結構いらっしゃるというふうに考えております。

設問22でございますが、「開かれた学校づくり」ということで、学校評議員制度等について伺っております。これについては、 の合計が約46%、 の合計が7.7%となっておりますので、どちらとも一定の評価を得られたものと考えております。

最後の設問23につきましては、全ての県立高校の男女共学化についての評価でございますが、 の合計が39%でございます。 の合計が19.6%となっております。評価する回答が上回っている状況でございます。ただし、最も高いのが、 どちらともいえないであり、まだ県民全体の評価は深まっていないところもあるように感じております。

以上が、高校教育に関する県民意識調査の概要でございます。

次いで、16ページでございますが、これは、県の教育委員会におきまして県立高校将来構想の策定とあわせまして、宮城県教育振興基本計画の策定を進めております。この計画策定のために、県民に対する意識調査を行いました。そのうちの高校関係分について抜き出したものでございます。1については、高校の教育について満足していますか、満足していませんかという問いでございます。これは幼稚園から高校まで聞いておりますけれども、学校別に見ますと、幼稚園、小学校、高校、中学校という順になっておりまして、一番満足度の低いのが中学校という状況でございます。

次に3でございますけれども、宮城県の高校生の大学の進学率並びに現役の進学達成率が低いと思いますがという問いでございます。これに対して最も多いのは 進学も就職も、生

徒自身が早いうちに将来なりたい職業などの希望を持ち、目標に向かって努力させることが大切である、ということをございまして、低位となっている原因を調べて、進学指導をもっとしっかりやるべきだより高くなっており、意見が分かれている状況でございます。

以上が、アンケートの結果でございますので、よろしく願いいたします。

荒井会長 説明が大変多数のものがございまして、バラエティに富んでいますので、説明自体について行くのがなかなか難しい部分がありましたが、恐らく委員の方々の評価の仕方と、調査結果のブレがあるものと思いますけれども、今の説明に関しまして、ご質問・ご意見があれば、お受けしたいと思います。

佐々木委員 一つ一つということではないのですが、全体的に見て進路指導主事の先生方だけが、ほかの方々と回答が異なっているという項目が幾つか見受けられるのですが、この中で一番現場の実情をご存じの先生方がそうお答えになっているということがとても気になるところであります。それで、自由記述の欄を最後に設けていただいていたかと思うのですが、そのあたりから何か見えてくるものとか、その理由として何かあるのか、あればお聞かせ願いたいと思います。

安住室長 自由記述についてですが、今見たかぎり、多様な意見がありまして、まだ詳細な分析は行われていなので、ここから何か一つを見出すのはなかなか難しいというところがございます。

進路指導主事の先生の見方が違うというのが確かに何件かありますけれども、設問によって違うのかなという感じがありますし、実際に進路指導というか子どもの学校の選択を指導しているという立場がありますので、そこで違いがあると考えております。

荒井会長 よろしいでしょうか。ほかに何か。

渡辺委員 通学時間ですが、疑問に思ったのは、中学校の方が1時間以内、高校が30分以内と、仙南地区ですけれども多くなっていますね。逆だったらわかるのですが、何でこういう結果が出たのでしょうか。ちょっと不思議に思いました。中学校は身近な学区で、通学時間というのは短いはずですね。高校は遠くなって通学時間が長くなるというのが常識的な考え方ですが、どうしてでしょうか。

安住室長 中学生の子どもたちには、高校を選ぶときに、どのくらいの通学時間の範囲の高校を選びますかという質問ですが、高校生は、今実際に通っている学校までの通学時間ですので、短くなっていると思っております。

荒井会長 やはり幅広い意味合いで考えるのが通常でしょうけれども、だんだん高学年になる

と近くが選びたくなるのですかね。

佐藤委員 この通学時間の件について思ったのは、今の中学校2年生は一学区になるという前提があり、選択肢が広いので、行きたい学校を単純に考えて、1時間以内でも行けるところということになるのではないのでしょうか。高校2年生では、学区制が引いてあって、単純に言えば近距離でしか受けることができないという結果だろうなと私は思ってとらえました。

あと仙南地区については、やはり交通の便なのかなと思います。仙北では、東北本線関係がよい状況で通っておりますので、電車かバス、または送り迎えという割合は大分違うのかなというふうに私はとらえました。

朴澤委員 確認ですが、4ページの「どの学校段階まで進学したいか」という問いのところの下のところの右、各地区の比較のところコメントがありまして、「子どもより親、高校生より中学生の方が、短大・大学への進学希望が高い結果となった」と書いておられるのですが、どの数字からこれを傾向として読み取られたのか、わからなかったのですが。

安住室長 中学生とその親につきましては、設問9でございますが、中学校2年生の短大・大学に行きたいというのは41.7%ということになっております。これにつきまして、中学生の保護者については51%になっておりますので、子どもたちよりも中学生の保護者の方が大学の方に行かせたいと思っているということで、そのように書いていると思います。

次に、高校生につきましては、下の方でございますけれども、総計は入れてないですが、普通科等について、子どもで59.0%、親で64.3%と高いところになっておりますので、こういう形の書き方をしていると思います。

朴澤委員 この下の左の矢印のところですね。わかりました。

西山委員 三つほどですけれども、一つ目は、これまでの県立高校改革のことについて、それなりに評価されてきたというのがわかったということ。二つ目は、アンケートの7から見ても、結構、学力というのが重視されているなというのを感じました。また、進学とかそういったところも全体としては重要な位置づけにあるということがここでわかりました。

それから、三つ目ですけれども、設問10-1ですが、5ページ目の下のところで、高校生で家計の状況から考えて適当だからというのが20.4%あるということなのですが、ここがどういう意味を持っているかというのが結構重要だと思っています。前に、福島県の方から、意外と学力の高いお子さんが、本当はいい大学に入れるわけですけれども、家計の状況であきらめて就職するという状況がかなりあるという話を聞いたことがあります。そのような方々がこの20%に入っているとすれば、奨学金等の充実を考えるべきです。

荒井会長 ご意見ということで承ります。ほかに、この調査、あるいは集計上のこと、ご意見でも結構です。

白幡(洋)委員 質問というより意見ですけれども、先ほど佐々木委員からもありましたけれども、進路指導主事の方々がちょっと変わった回答をしているということで、これはこれで、なぜというのを追求していかなければいけないと思いますけれども、基本的には合計あるいは平均を見る場合には、外して併記すべきではないかと思います。余りにも異色な気がしますので。ここを合わせてトータルカウントするのは少し間違った方向性が出るのではないのでしょうか。ただ、全体の数が少ないので、そんなに大きく影響しないかもしれませんが、二つに分けて併記した方がいいのではないかなという気がしました。

それから、これは感想ですけれども、いつの時代でもそうですけれども、親の思いと子どもの考えは違うのかなというのがわかったことと、意外と総合学科に対する期待が高いということが、私としては自分の思いからいったら随分驚かされました。

それと、我々もこういうアンケートをよくやりますけれども、自分たちがやっていることがいいか悪いかパターンアンケートで求めますけれども、「わからない」とか「どちらともいえない」というやつをどう見るかという問題があります。意外とそういうパーセントが多いときは、評価したところをクローズアップするよりも、「どちらともいえない」とか「わからない」というところを、先ほど自由記述の話もありましたけれども、もう少し深掘りしないと本当の形が見えてこないのではないかという気がします。「わからない」「どちらともいえない」というのが思った以上に多かったかなという気がしております。感想でございます。

井口委員 意見といたしますか感想といたしますか二つになるかと思いますが、後ろの方からいって恐縮ですが、16ページの資料で、高校教育について県民の不満というのはやや多目なのかなというふうに思いますが、保護者の皆さん方からいえば結構満足されているようで、そういう意味で、実はこのずれというのはどうなのか、やはり掘り下げる必要があるのではないかと思います。一つ言えることは、高校教育の情報というのが県民の皆さんに十分発信されていないのではないかというふうに思います。同時に、県民としてもっと高校教育に関心を持つべきというふうにも思いました。

続いて10ページ、高校入試の方法についてであります。先ほど来お話がありましたように、進路指導主事の先生と保護者ですね、やはり気になります。ただ、推薦入試の課題である生徒の実態把握ということと推薦入試の合否のはざままで、先生方は相当悩まれているのではないかというふうに思います。中には、入学試験一本でいいのではないかと、つまり、結局推薦入

試であっても学力のレベルというのが前提になっているのではないかと。それから、中学生が本当に入りたい高校が明確になりにくいのではないかと。高校の違いというのは、点数によって意外に決められてしまって、違いというのが余り明確ではないのか。そういう意味では、全県一学区を前提として、そのことの是非は別問題として、特に今年度から各校でオープンスクールだとかあるいはホームページ等が充実してきていますので、さらにそれぞれの学校の特色などの情報が提供されて理解は進むというふうに思いますが、今の段階においては、どうも入試については、子どもにすれば「チャンスが多い方がいいか」というぐらいのことしか、ちょっと単純にこんなところしか感じられない。やはりもっと意義づけをしっかりとしていく必要があるのではないかとこのように思います。

また、三つ目として、特色の出し方とか、あるいは中学生の学ぶ意欲に対する柔軟性が欲しいかなというふうに思います。総合学科では、入学後、普通科希望の声がある。進学校というのは、やはりまだ仙台に集中しがちであるということ、そういうことからして、いわゆる進学校だとか、あるいは特色ある課程を持った学校だとか総合学科というのは、もっと県内各地に必要なのではないかと。進学コースだとか総合学科が、場合によっては一つの学校の中にあるというような工夫ができないのかどうか。仙台近郊以外の高校にも、進学だとかあるいは専門性に対応できる学科ができないのか。ですから、場合によっては、中学生の希望によっては定員が柔軟にできるような体制とか、これから生徒数の総数は例えば学校においてはいろいろな関係がありますから、これは固定されるにしても、もう少し学科などの決め方においてフレキシブルな定員枠というのが設定できないのかどうか、こういう工夫がこれからできたらいいのかなというふうに思います。

四つ目として、今さら申し上げるべきでないかもしれませんが、男女共学校でなければ本当にだめなのか。全体のアンケートとしては理解も進んでいるということではあると思いますが、男子校だとか女子校だとかということも一つの特色の出し方ではないかなという考え方も依然あるのではないかと。ですから、そういう場合においては子どもが選択できる仕組みというものを維持しておくべきではないかと。このことにつきましては既に決着済みのことでしょうし、時折議会等でも出て、あるいはいろいろな活動があつて教育長や皆さん方苦勞されていると思いますので、ここの点は一応話すだけにさせていただきます。

五つ目として、大学とのかかわりで高校の教育が決まる側面がある。これは、現実にはそうではありますが、どうもいろいろなアンケート等を見て、大学の進学率とかなんかということも非常に重要なポイントかもしれませんが、もっとそういう格好でなくて、大学とのかかわりで

考えるということではなくて、高校として本来どういう形であるべきなのかなということをもう少し考えていただきたい。せっかく全県一学区ということでもありますので、最終的には宮城の高校教育というのは将来に期待を寄せざるを得ませんし、そのためには何と言っても既にいろいろとご検討いただいているように高校教育の充実が大前提でありますし、改めて情報発信を含めて、それぞれの学校で先生方も含めて頑張りたいというふうに思います。教える側の理論だけではなくて、改めて子どもの側に立った教育、そういう意味ではこういうアンケートを小まめにとって、それを一つ一つ分析をしてこれからに生かすという基本ということとは非常に重要なかなと思います。

荒井会長 大体質問等は承ったような状況でしょうか。少し時間が押しておりますけれども、複数の委員の方々から出された論点を挙げておきたいと思います。まず1点は調査結果からということではございますけれども、進路指導主事の先生方のご意見、現場に一番詳しいあるいは近いという方の意見が、他の調査対象者と少し傾向が違っている部分がある。そのあたりをどういうふうに考えていったらいいかというのが出てきたと思います。

それから、もう一点は、高校選択に当たって、学力の問題あるいは大学進学の問題というのが支配的になっている。ただ、この問題をどういうふうにつかまえるかというのは、今ご意見がございましたように高校教育本来の見方でもって見るというふうな見方もございますし、以前に朴澤委員からも出ましたけれども、高校教育というものを大学とのつながりで考えるのか、あるいは中学の積み上げと考えるのかというところで、先ほど議論も分かれているところかなというふうに思います。

もう一点は、親の思いと子どもの判断とといいますか、選択理念、意見が少しずれているということでありましたけれども、今の社会全体の経済事情から考えますと、家計というののがかなり子どもの選択を拘束している部分があるのではないかなというふうなご意見がございました。それに、私の方で伺っていたことを意見として加えれば、5ページのところに世帯主の業種による比較というのが、第一次産業、第二次産業、それから第三次産業に分けて詳しく出ていますが、宮城県の産業構造がどういうふうに今後変わっていくのかということにかなり依存する部分もございますけれども、第三次産業の方の業種に携わっている保護者の方で、短大・大学以上のかなり高学歴なものへシフトしていくというところがございます。このあたりのところが、単純に子どもの現在の進学希望よりも親の期待の方が大きいというところがあるわけですが、それよりもさらに親の職業の中でどういう産業が今後伸びていくのかということに従って、県あるいは社会の需要として、どういう学校段階までの学習が必要なのかなというのが

ここに出ているような感じがいたします。

以上、五つぐらいのポイントを今のご議論の中で挙げさせていただきましたけれども、それに続いて、もし二、三ご意見があれば伺っておきたいと思いますが、いかがでございましょうか。

まだいろいろご意見がおありだと思えますけれども、調査の集計結果につきましては、今ご報告いただいて議論させていただいたということで一応閉めさせていただきたいと思えます。

## (2) 社会の変化や生徒の多様化に対応した学校・学科構成等の在り方について

荒井会長 それでは、続きまして、議事(2)に入っていきたいと思えます。社会の変化や生徒の多様化に対応した学校・学科構成等の在り方についてということでございます。

これまでの議論で、高校教育をめぐる現状や課題、それを踏まえた今後の県立高校教育のあり方につきまして、人づくりの方向性と、そのための高校教育改革の方向性の観点からいろいろご意見を頂戴したわけでございます。そうした、いただきましたご意見を構想としてどういうふうにまとめ上げていくかというのが、これからの審議会の重要課題になっていくわけでございますけれども、今後は具体的にそうした問題をどうしていくのかということで、ご意見を収斂させていきたいと思っております。これに関連いたしまして、事務局で学校や学科に関連した資料をご用意いただいております。事務局からご説明をお願いしたいと思います。

安住室長 それでは、資料3になりますけれども、学校・学科構成等の在り方の検討資料ということでご説明させていただきます。

この資料につきましては、今回事務局の考え方を示してご意見をいただくという形ではなく、現状等についてご説明させていただきまして、委員の皆様からご意見をいただき、適宜その結果を踏まえながら方向性をまとめていくという形で考えております。

それでは、資料3の、2ページをお開きいただきたいと思います。今回ご議論いただきたいのは、新しいタイプの高校の現状ということでございます。「高校教育の複線化」として「従前」と「現在の状況」を模式的に示させていただいております。従前というのが、我々の世代が学んだ高校のタイプというか分類でございます。これが現在はどうなっているかを見ていただきますと、まずは大きな違いといえますのは、中学校から高校の中等教育に係る仕組みといたしまして、中高一貫校ができていくということでございます。

それから横線点線が学年制と単位制を分けて入っていますが、その上の分の単位制ということでございますが、定時制、通信制課程では昭和63年度から、全日制課程は平成5年度か

ら導入されました。あとは総合学科でございますが、これも単位制の高校でございます。

あともう一つは、従来の定時制であれば、夜間を中心にして4年で卒業するというのが大体の形でしたが、現在は多部制ということで、昼夜間の多部制、単位制の定時制課程ということで多様な課程が導入されております。通信制課程については、宮城県には仙台一高だけですが、これについてはもう随分前になりますけれども、通信制課程の単位制の高校という形に変えてきているところでございます。以上のように、現在の高校の姿につきましては、総合学科高校、単位制高校、中高一貫校、多部制定時制課程という形で変わってきているということでございます。

次に、中高一貫校と多部制定時制課程、総合学科について簡単に説明させていただきます。

まず、4ページをお開きいただきたいと思います。中高一貫校でございますけれども、平成11年4月から、従来の中学校・高等学校の区分に加えまして、中等教育の多様化を図るということで、中等教育の6年間を一体的に学べるという形で導入されたものでございまして、形態的にはこの箱の中に三つ書いてございますけれども、まず、6年間を一つの学校で一体的に行うということで中等教育学校というのがございます。それから、中学校と高校を併設した形の併設型の中高一貫校、既存の中学校と高校の交流を深めることによって行う連携型の中高一貫校と、三つのタイプがあるということでございます。

県内の中等教育学校につきましては、非常に期待が大きいようですが、来年4月に仙台市におきまして、仙台女子商業高校の校舎を利用して、仙台青陵中等教育学校を開設するということになっております。仙台市立として1校できるということでございます。

併設型につきましては、平成17年4月に古川黎明中学校・高等学校を県の方で設置しております。また、平成22年4月には、現在の宮城二女高を仙台二華高とし、併設型で開校する準備を進めております。

連携型につきましては、現在、志津川高校におきまして、南三陸町立の四つの中学校と連携した教育課程や教員の交流による教育を図ってきているということでございます。

次に、総合学科でございますけれども、資料の3ページに戻っていただきたいと思います。総合学科につきましては平成7年度に設置しました学科でありまして、この中に「産業社会と人間」という科目が書いてありますが、1年次に「産業社会と人間」という科目を学びながら自分の適性とか進路希望を考え、それを踏まえて2年次からの各系列の科目を選択していくという学科でございます。現在6校、平成22年度には石巻地区とございますけれども、河南高校を総合学科に再編するということになっておりまして、平成22年度までに7校設置される

ということになっております。

メリットといたしましては、高校教育の中で自分の興味・関心や進路を考えて科目を選択できるということが挙げられます。問題点といたしましては、生徒減少の中で学校が小規模化していき、多様な選択科目の開設が難しくなっているという状況がございます。また、2年次から選択科目を選択し学習するということがございますので、到達レベルを専門高校に近づけるのが難しいという課題もあります。

次に、普通科の単位制高校でございます。まず、先ほどの図であれば、専門高校の単位制高校というのもありましたけれども、宮城県では専門高校の単位制高校というのは設置してございません。

普通科の単位制高校でございますけれども、単位制を導入することにつきまして教員の加配制度もあり、多様化した子どもに対応した選択を増やし、きめ細かい教育をできるということで導入しておりますが、現在導入しているのは蔵王高校と利府高校と、宮城第一高校でございます。

次に、多部制定時制課程でございます。また4ページを見ていただきたいと思います。下の方に表を書いておりますが、この表は現在の定時制課程の高校を表したものでございまして、仙台市を含む形で示してございます。昼間部として5校設置しており、夜間部としては11校設置しております。そのうちの昼夜間の多部制定時制として貞山と東松島と田尻さくら高校の3校を現在設置しております。従来は、夜間を中心にした定時制でありましたけれども、現在は学校になじめない子どもたちの受け皿としても役割が期待されているところでございます。

以上が、新しいタイプと言われる学校の説明と宮城県の設置状況についての説明でございます。

次に、学科の関係でございますが、6ページをお開きいただきたいと思います。

この資料につきましては、宮城県の学科構成と、全国、あるいは東北隣県と生徒数が近い長野県と広島県の学科の構成について比較したものでございます。私立を入れない形の平成19年度の公立の全日制課程でございますが、学科の募集定員ではなくて、実際学科に入学した実人数という形で整理しております。ページ下部の棒グラフを見ていただきたいと思います。一番上が全国、次が宮城県でございます。全国と宮城県を比較した場合に、ほぼ同じ傾向ですが、若干農業と商業で宮城県が高くなっておりまして、普通科と総合学科が全国よりも若干低いという傾向を示しております。

次に、岩手県、山形県、福島県の3県と比べてみますと、全体的に3県とも職業系の学科割合が高い傾向が見られます。特に工業系の割合が高く、また総合学科の割合も高くなっております。その分、普通科の構成割合が本県より低いという状況が見られます。

次に、長野県につきましては普通科の割合が高いという特徴がございます。広島県については総合学科の割合が高い状況になっています。これが各県と比較したものでございます。

7ページ以降につきましては、それぞれの学科の学習内容、あるいは卒業後の就職・進学状況の経年的な変化等について学校種ごとに提示したものでございますけれども、これについての説明は省略させていただきます。以上でございます。

荒井会長 それでは、ただいま説明がありました内容を参考にして議論を進めていきたいと思っております。まず30分程度、学校や学科を今後具体的にどうしていけばよいのかということで、自由にご意見を頂戴したいと思います。その後、できましたら20分程度で、今度は委員にご意見をいただいた中で幾つかの論点に絞って、学校や学科の今後のあり方について、ある程度方向性を固めていきたいと思っております。それでは、委員の先生方からご意見、ご質問等をお願いしたいと思います。

白幡(洋)委員 先ほどのアンケートと今のご説明を踏まえてですけれども、とりあえず気がついたことを一つだけお話ししておきたいと思っておりますが、アンケートでも総合学科を増やすべきとの回答が結構多く寄せられております。それで、また同じくアンケートの中で、総合学科にいらっしゃる方々の大学進学希望が低いという結果が出ていますけれども、要は総合学科にいる間に、高校を卒業して社会に出たときに、最低限身に付けておくべきことをきちんと身に付けてほしいという気がしまして、私の個人的な意見ですけれども、総合学科こそ3年間ですべて専門科目も必修科目も身に付けるというのは厳しいので、中高一貫校化すべきではないかという気がします。6年の中できちっと専門科目も必修科目も受けてもらって、職業教育もきちんとやるというような形が、学ぶ生徒たちにとってもいいのではないかなという気がしております。単に総合学科に対する賛成が多いということだけではなくて、以前の会議でも総合学科の専門科目の教育はいいのですけれども、設備が専門学科に比べて非常にプアであるというお話もしたかと思うのですけれども、だからこそ中高一貫校化していくべきではないかなというような気がしました。以上です。

荒井会長 今のところではそれぞれ自由にご発言をいただいて、後で少し焦点を絞った形で議論をするという形にしたいと思っておりますが、いかがでしょうか。

朴澤委員 前回出ていないので議事録等で拝見したことを踏まえてですけれども、大学の位置

付けというのは、今グローバルスタンダードとかそういう考え方に向けてという中で、特に前回の話では、高校と地域との関連性とかそういうことをあまねくお話しになったようですが、そういう観点で、新規ということになりますと、これから10年間の日本の状況を考えますと、やはり高齢化社会とかそういう方向性に対してどういうふうに人材を育成するかということが、高校レベルの地域として考えるべき点として一つあるのではないかと思います。

実は、今度、厚生労働省の介護福祉士関係の制度が相当変わりました、介護福祉士の受験資格については、高校生と大学生が同じ土俵で、いわば資格取得のための試験を受けるという形になるわけです。考え方は両方ありますけれども、ある意味では大学に行かなくても高校3年間だけでそういう受験資格で合格を出せるということにもなるわけですが、今まで県内で二つほど受験資格を出しておられた高校が、今回はいわゆる厚生労働省と文部科学省との相乗りで、いわゆる福祉系高校という形の対応をとっておられないようです。県のいろいろ訪問看護員の上級資格とありますが、県で出す資格に対応する教育は引き続きやるようですけれども、介護士の受験資格自体はちょっといろいろな事情があるかもしれませんけれども、いわばそういう方向に向けての人材育成は一旦県立としては考えておられないという今のところの形になっているわけです。こういったあたり今後10年間のそういう位置付けを踏まえたときの考え方として、学科の構成としていろいろ考える必要があるのではないかと思いますという感じが実はして拝見しておりました。

それから、総合学科ですけれども、先ほどの話にもありましたけれども、現実に行っている学生さんが、別な学科の方に興味を示しているという結果も出ているということでした。結局まだ中身がはっきり通っている生徒さんもつかみ切れていないという感じで、そういうようなことがその数字として現れているのではないかなと思います。単独で総合学科でやっておられる高校と、それから普通科や農業科と併設しておられるところと両方あるのではないかと思います。そこら辺の違いとありますが、そういったあたりの多少の分析とありますが、そういったところがもしあるのであれば示していただければと思います。

荒井会長 今朴澤委員の方から、二つ質問とありますがご意見が出ましたけれども、もし両方答えていただけるのであれば両方、あるいは調査方法、調査シートの中に出てきたようなことを含めてということであれば、どなたかにご回答いただきたいと思います。

高橋高校教育課長 それでは、私の方から介護福祉士の受験資格のことについて、今後、現状での方向性ということでご質問がありましたので、お答えをしたいと思います。

実は、介護福祉士の受験資格を取らせることについては、これまで高校を卒業しても受験が

できるようにということで指導をしてきたわけですが、受験資格のハードルがかなり高くなりました。現場での実習の時間が大変多くなりまして、現状では、それを高校の教育課程の中で消化するのは極めて困難であるということで、県が認定するいわゆるホームヘルパーの方の資格の取得を目指すという方向にしたところでございます。ただ、今後につきましては、昨日公表されました新しい学習指導要領の考え方も踏まえつつ、新しいそういった福祉系の教育内容をどうするか、さらにこの場でもご議論をいただければ大変ありがたいというふうに考えているところでございます。

荒井会長 進路指導主事のことではわかっていることがあれば、総合学科のことについてもお願いします。

安住室長 先ほど総合学科に入っている子どもたちのことを申し上げましたが、今総合学科は6校ございまして、他の学科が併設されている高校が2校、単独校が4校でございますけれども、今回調査をお願いしました総合学科高校4校はすべて単独校でございます。ですから、併設校の子どもたちの意見は反映されていない形になっております。

荒井会長 私の方からの質問になってしまいますけれども、進路指導主事の方のご意見が、県民に比べますと約半分になっていて、総合学科を増やしていくべきかどうかということについて、県民が一番高く、次に中学・高校の保護者、それから最後に進路指導主事というふうに減っていくわけですけれども、特に現場に近くなっていくとどうも総合学科のイメージが低下していくというのが、これが特定の総合学科に関しての評価を示しているのか、あるいは総合学科一般に関しての評価なのかあたりで、何か示唆いただけるような情報があれば参考になるかと思いますが、いかがでしょうか。

安住室長 総合学科については、学校の数が少ないというのが一つと、もう一つは、例えば宮城野高校は普通科と美術科と総合学科が併設されていますが、進学系の総合学科になっているのに対し、他の総合学科高校は、農業学科などを中心に行っているという違いがあります。総合学科でもそれぞれに違いがあり、正確につかめないところがあると考えています。

荒井会長 先ほどの介護福祉士の受験資格についてですが、そういうことを研究している学生が私のところにもいまして、介護福祉士等の場合に、受験資格が高度化していくとか、あるいは高学歴化していくということが余り現場との要請にうまく折り合わないというふうなところがあるようです。むしろ一般の専門職であるとかそういう職業人の場合に、専門制というものが強調されるのですけれども、むしろ対象者に対して感情移入ができるタイプの人でなければ、きちんとした介護福祉士の仕事がこなせないという部分もあって、単に学歴が高ければいいと

ということではないので、むしろ専門高校としての役割というのが求められているところなのかなというふうに思っています。

ほかにどなたかがでしょうか。

西山委員 6ページ目の資料を拝見しますと、近県と大体同じぐらいの規模の県と全国との比較というところで、大まかに言えば宮城県は構成比においてそんなに大きな特徴があるわけではないと思います。全国の平均のクラスという感じがします。ただ、先程からご指摘のあるとおり、総合学科の5.2%というのをどう考えるか。全国レベルよりも低いし、広島等よりも低いというのをどう考えるかという議論が残るかなと思います。

それで、これも高校の先生から聞いた話ですけれども、おっしゃっていたのは、総合学科で最初に設立した総合学科というのは、今議論をした直後ということもあって非常に質の高いものができたけれども、徐々にその辺の質を維持するのが難しくなっているということでした。それが正しいかどうかは別として、そうなってくるとこの総合学科5.2%を少し上げていくとすれば、その質をどう維持していくかというのが非常に重要なところだというふうに思います。それで、総合学科とはいえ、何でもやるのはかなり厳しいので、ある程度ターゲットを絞ってやっていくということが重要ではないかと感じました。

それと、二つ目は、3ページ目、4ページ目で、総合学科や単位制高校、中高一貫校、多部制定時制課程というのを改めていろいろ説明を伺った訳ですが、確かにこういうような体制をつくって、新しく高校に入る方々のニーズに対応していくということは非常に重要です。そうなってくると、こういうものを各学区に、すべての学区につくるというのはまず無理なので、そういう意味からいっても学区撤廃というのはよかったのではないかなというふうに私は思います。以上です。

荒井会長 ほかにいかがでしょうか。はい、どうぞ。

木村委員 まずは、学科の構成の中で、先ほどの話から6ページの、宮城県は普通科が多くて岩手、山形、福島については職業系の学科が多いという現状ですけれども、これは宮城県をこれから議論するに当たって、本当に地域の実情や現状に合わせているのかということを見るべきではないかと思います。特に先ほどのアンケートでは、工業系の学校に進路希望をしている子どもが多い、または親御さんも多いということが現状としてありますし、これから宮城県の方もセントラル自動車であるとか工業系の就職先でいっぱい雇用が増えるわけですので、そういった部分で今後学科の再編を含めて考えていただくのであれば、工業またはもう少し絞って自動車関連の専門的知識や技術が養われるようなそういう学校を増やしていくことも大切な

かなと思いました。

というのは、普通科の高等学校の中身を先ほど5ページで拾ってみましたら、石巻の例で言うなら石巻高校、石巻好文館高校、そして河南高校、女川高校、石巻市立女子高校などがありますけれども、明らかに学力の差と、それから進路の割合というか、進学を多く希望する学校もありますけれども、ほとんどが進学よりは就職というような、しかも地元への就職希望をするような子どもたちが多い学校もございます。7ページを見ますと、普通科の学習内容が、一概にこのすべての学校の学科に必要なのかということを感じたわけです。なぜそう思うかといいますと、自分の娘も今高校2年でちょうどアンケートの対象年齢ですけれども、一応進学校ではありますが、数学であるとか理科系の科目で大変につまずいております。やはり勉強の内容もそうですけれども、一旦つまずいてしまいますと苦手意識が強くなってしまって、そのほかの学習にまで影響するということもあります。また、娘の友達の中には、そのつまずきから学校をサボりがちになったり不登校になってしまったり、また学習意欲の減退であるとかいろいろなことが起きているように聞いています。それは、他校でも同様の現象があると伺いました。そういったことから考えても、普通科の学習内容を一概に同じにして、それが評定の基準になったり、その子の評価につながるのが高校の当たり前のことなのですけれども、そういうことも見直ししていくべきなのかなと思った次第です。

もう一点、高校が最終学歴となる就職希望の子どもたちも多いと思うのですが、そういった中で特色ある学校づくりをするためには、3年間の学生生活で、もちろん学習面とか技術面の育成は十分にやっていかなければならないのですが、もう一つ大切なことは、学校生活がより充実して楽しいものにならなければならないのではないかと思います。そうしないと学校に行かなくなるわけですし、現状の不登校であるとかサボリであるとか、途中で退学してしまうとかそういう現状が出てきていますので、学校づくりをこれから本当に考えていく中では、教科の学習のみならず部活動であるとかボランティア活動や社会活動への取組など、そういったものも含めて総合的に取り組んでいかなければいけないのではないかと思います。

特に、それには先生方の資質であるとか姿勢、それから熱意というものがかわってくると思います。高校の先生の中に、その辺の差をすごく大きく感じています。部活動に熱心で、もちろん学校の仕事も一生懸命やっというのでありますが、そういったところで一生懸命子どもにぶつかって体当たりの教育をされている先生方もいらっしゃれば、授業だけ終わったら後は職員室にこもっていらっしゃる先生方、その辺は子どもたちもすっかり分かっているようなので、先生方の中でも、もう少しこういったところを自分の得意分野にしよう

ということで、今後新しい若い先生方には、高等学校の現場で、私はこの得意分野を生かした教育者になっていくぞと、そういう意気込みを持った先生方を多く採用していただきたいと思いました。以上でございます。

白幡(洋)委員 先ほど総合学科のところの一つだけ言い忘れたのですけれども、総合学科を中高一貫で6年間やってほしいと私自身は思っていますけれども、ただ6年間ずっとやるわけではなくて、いわゆる単位制と組み合わせて4年ぐらいやって工業高校とか商業高校とか農業高校に行ってもいいのではないかと思います。総合学科ですべてを持つというのは大変ですから、もちろん、総合学科でしか持ち得ないものがあるのもいいのですけれども、総合学科である程度のものを身につけて、今度は工業とか商業とか農業のあるところに移っていくというような組み合わせがあってもいいのではないかと思います。ですから、総合学科と単位制を組み合わせるといような選択肢も一つ考えてみると、生徒の選択の幅が広がるのではないかと、あるいは、より専門の設備なり先生がいるところで学べるのではないかとこの思いがあります。

荒井会長 中高一貫校のプログラムの中で、4年目なり5年目のところで専門高校の方に行くことがあってもいいのではないかとこのことですね。

白幡(洋)委員 そうです。

渡辺委員 私は、伊具高が総合学科なものですから大変就職率もいいですし、高校を卒業して就職する場合は総合学科がいいのかなという考えです。ただ、いろいろな職業もございまして、いろいろな選択肢もあるということでもありますので、一つの能力を伸ばすというのは大前提で考える必要があるのだらうと思っておりますので、もっと専門的な分野を取り入れてもいいのではないかなというふうには考えております。

また、職場体験希望が多いようですけれども、やはり職場体験というのは応用力を考えた場合においてもぜひ必要ではないかなというふうに思っています。伊具高でも当然やっていますが、中学校でも最近職場体験したいという申し込みが役場にもあって、受け入れているところがございますので、そういうのは積極的にいろいろ今後ともカリキュラムの中に入れていく必要があるのではないかなというふうに思っています。

それから、中高一貫だけお話しされていますけれども、高校と短大ということで高専があったと思うのですけれども、名取にも高専がありますが、そこは結構就職率がよかったと思うのですが、そういう考え方も一方であっていいのかなという感じもしております。

佐藤委員 先ほど来、総合学科の件と中高一貫の件についての進路指導主事の方の意見について見ているわけですが、特に白幡(洋)委員のご意見がすごくいいなと思いました。中高

一貫については、今現在、古川黎明中学校について、毎年大分倍率の高いところで入試が行われて、来年開校する青陵中学校についても、先日行われた学校説明会については、保護者の方の関心がとても高かったということがあります。ただ、この青陵中学校に行くにしても、募集要項のところを見ますと、国公立大への進学率20何%以上に、俗に言ういい大学の方への進学を目標に定めているというようなことが書いてありました。その辺を考えると、まだ実際のところは、さほど県内の中で進んでいない中高一貫について、進路指導主事の先生方がなぜ増やす必要を感じていないかというところが、先ほどまだ分析が余りにも細か過ぎてできていないというご回答でしたけれども、現場の先生方のご意見というものの中に、何か見えるものがあるのかなというのがとても気になるというか、なぜ先生方はそんなに、人気があるのに必要性を感じていないのか、その辺を知ることによって、例えば保護者でいえば総合学科がたくさんあると、何か進路の幅が広がりそうなイメージを持つのですけれども、この辺の先生方と保護者と子どもたちの意識の違いというのがはかれると、もっと高校のあり方とか、普通科と専門学科とか総合学科というところの配置の割合的なものが見えて、必要性が見えてくるのかなと思いました。進路指導の先生方から返ってきたコメントが、まとめ切れないものなのか、もう一度お伺いしたいなと思います。

荒井会長 むしろこれは高校の方の進路指導主事の意見を聞きたいような関係なので、中学の進路指導主事の先生がどこまで見えているのかなというところが正直気になりますけれども。

高橋高校教育課長 高校の立場から、中学校の進路指導主事の先生のお考えをダイレクトで聞くチャンスは余りないものですから、あくまで推測ということで発言させていただくと、中学校の進路指導主事の先生は、目の前にいる生徒をどこの高校にしっかり入れるかということが極めて大きな課題になっていると思われれます。そうすると、例えばこれから中高一貫校をつくるとしたときに、その中高一貫校を目指す生徒が、果たしてどの程度の学力であれば合格できるかということを見通すのは極めて難しいわけでありまして、そういったことで、ひとまず今の状況についてしっかり指導できるような体制を中学校でも高校でも組みたいという気持ちは強いかと思います。そういった点もひとつ、こういったことで新しい取組についての考え方を聞かれたときに出てくるのではないかというふうに推測したところでございます。

安住室長 中高一貫校について、進路指導主事の書いているものをすべて分析しているわけではないのですけれども、二、三ご紹介させていただきたいと思います。

これは、「評価しない」という形で書かれた方ですけれども、学力中心型になっているのではないかというのが一つ、あとは、進学指導が中心で好ましくないが一つです。それから、中

学校から高校に行く段階でそのまま上がりますけれども、そこで進路選択の機会を設けることが大切ではないか。あとは、小学校の段階でも入るわけですがけれども、小学校卒業時点で6年間を見通す選択は実際できないのではないかというふうな意見がありました。

荒井会長 これはちょっと余分な情報かもしれませんが、高校の進路指導主事に聞いた方が、聞く必要があるというふうに申し上げたのは、実は総合学科、宮城県に限らずいろいろなつくられ方をしております、総合学科に入ってから出るまでに、生徒はいろいろな進路に揺らぎ迷うのですけれども、この調査結果で出てきているところは、入るときに決まっていた、要するに進学なのか就職なのか、あるいはそれ以外の部分も含めてですけれども、決まっていた子は結局そこに落ち着いているんです。総合学科がうたい文句にしているような進路の柔軟性といいますが、自由度は必ずしも今のカリキュラムの中では達成できていないということがありまして、それはもう四、五年前の調査ですので、果たして今の総合学科がどういうふうに子どもたちに指導を展開できているかということは、これはまだ実際よくわからないところがあります。

総合学科の中にも、新たにその目的のためにつくった高校もありますし、あるいはこれは言っていないかわかりませんが、かなり周辺的な地域で専門高校と普通科を一緒にすることによって、何とか合併効果を上げようというふうなところもあるかと思しますので、実態としてはいろいろな目的があるのだらうと思います。ですから、それが結果的に高校教育の改善に向かうような形になっているところがどのくらいあって、理想的にいつているところがどのくらいあってということでもって、それを積み上げていきますと、あるいは可能性もあるのかなと考えたりしますけれども、これと同じようなことは中高一貫校に関してもどうも言っているような印象がございまして、例えば外進で定員割れを起こしているというようなところもないわけではないですね。そうしますと、何のための中高一貫なのかという感じもしないでもないですけれども。理念としての社会的な体裁のよさと、実行できる条件というものがどうも乖離している部分があるような状況のところであると。

かなり総合学科を中心にして委員の方々の関心が集まりましたが、先ほど木村委員から出ましたように、産業の方の人数とどういうふうにマッチングさせるかとか、あるいはこの間の議論に、先ほど高専の話をおっしゃっていただきましたけれども、実際には高校の卒業生で宮城県の場合には、現役の場合には42%ぐらいあるかもしれませんが、それで22%ぐらいが大体専門学校に進学していくわけですがけれども、対しますと、職業教育というのが要するに高校教育で閉じていくのかというあたりのところを一応検討しておかなければいけない課題があっ

て、高校と、それから専門学校に進学して2年なり、あるいは医療系の場合だと3年ぐらいの課程を勉強する。専門学校は民間がほとんどですから、公立と民間との要するに意見ということにはなりませんけれども、教育システムとして考えたときに、卒業生の2割以上の子どもが専門学校に行くということを考えたときに、高校教育だけでもって職業教育の問題を閉じるということにはいかない。大学と高校とをどういうふうに関係させるかということの発想が前からご意見が出ているところですが、それと同時に、大学ではないけれども、準高等教育機関としての専門学校とどう比べていくかということも二つ大きな課題なのだろうと思いますが、そこら辺も含めて、大して時間はございませんけれども、3人ぐらいの方からご意見を伺えればと思いますが、いかがでしょうか。あるいは、それに限りませんが、むしろ今日いろいろご意見を出していただきまして、それを論点整理しまして、かなり絞り込みをしていかなければならない段階に入っていくかと思っておりますので、今のうちに言っていただくと、後で想定することが可能なのですけれども。

渡辺委員 ちょっと簡単にだけ。伊具・丸森には総合学科の伊具高がありますが、隣の角田市に普通科の角田高校があって、伊具・角田と丸森は、両方に分かれて入るような形でありますので、当然、角高からはどんどん大学に進学していただきたいというのが私の願いでありまして、特に宮城県は大学がいっぱいあるわけでありまして、そことの連携は欠かせない。これからのいろいろな技術革新とか新しい時代を迎えるに当たっては必要な課題ではないかというふうに思っていますので、そういったところとの連携を考えたときに、大学との連携も踏まえながら、高校のカリキュラムを考えていく必要があるのだろうというふうに思います。

もう一つは、岩手、山形は商業と工業系の学科が多いということでもありますので、そういう選択肢を多分持っていらっしゃる方がいると思っておりますので、そういったところも若干踏まえながら、そういう選択肢がもっとニーズがあるのかどうかによってまた変わってくるかなというふうに思いますが、いずれにしろそういう特色ある高校をつくっていく、そして選択肢の幅を広げていくということもありかなというふうに思っております。ただ、さっき議論になっていた、高校を卒業して社会に出るのか、大学を出て社会に出るのかによって目標が違うとは思いますが、その辺を踏まえながら、高校のあるべき姿をとらえていく必要があるのではないかと。ちょっと漠然とした意見でございましたが。

尾崎委員 大学進学によって職業教育がそちらの方に移行するようには見えますけれども、細かく内容を見てもみる必要があると思います。例えば、1992年度と2005年度の大学入学志願者の数を比較しますと、506万人から359万人と70.9%になっているのですが、工

業に関係する工学部の志願者数に限ると66万7,000人から37万5,000人に、こちらの方が56.2%になっており、工学部離れが進んでいることが心配されます。ですから、工業に関していえば、工業に関する職業教育が必ずしも大学にシフトするというふうには見えにくいということがあると思います。

ご存じのとおり先進国では大学進学者が増加しまして、一般化することによって、今度は反対に大学進学の間意図が希薄化するという傾向が出てきているという状況があり、そのことを考えると高等学校での職業教育というものもしっかり考える必要があるのではないかというふうに思っています。

荒井会長 今挙げられた数字は、大学入学志願者の延べ数ですね。

尾崎委員 そうです。それが一般的には70.9%に減っているのですが、工学部に関しては56.2%に減るということです。

荒井会長 これは延べ数ですから、この間の経済不況でもって、1人当たり4校から5校平均受けていた大学入学志願者の数が激減している状況があるように思います。

尾崎委員 いずれにしても、工学部に希望している学生数が減っているデータではないでしょうか。

荒井会長 どちらも減っているのではないかと思いますけれども。

公平委員 大学進学率の話題ではないのですけれども、2年後に迫った全県一学区ということを見ると、現状の高校の勢力図というのが激変するのかなと。その状況で、平成32年ぐらいには約3,000名の子どもさんが減るという部分にも目を向けておかないと、高校の形だけの議論では、非常に県内の高校のあり方というのが、今ここで話題にしていることよりもよくない状況も考えられるのではないかなというふうに、ちょっと不安に感じております。

中高一貫校の話題が出ましたが、大崎地区の古川黎明中学校の1期生の子どもが今高校1年生になっていますが、受験勉強がなかったという部分で、15歳という成長期を考えると、非常に立派に、健康に、体育関係の結果なんかも、古川黎明高校1年生の大崎地区高校総体での活躍なども聞いていますし、学業とは関係ない部分かもしれませんが、中高一貫校というあり方、そういった子どもたちの健康という部分でもいいことではないかなというふうに思っていました。

荒井会長 今のご意見の前半の部分は、一学区制をとることによって一極集中が起こることによって、全体の様相が様変わりするのではないかというご懸念ですね。

公平委員 はい、具体的には見えませんが、

荒井会長 あと数分ございますが、いかがでしょうか。

菅野委員 今、中高一貫校の話が出ていましたので、その延長上でお話をさせていただくと、中高一貫校において15の春の入試がないということによる連続性ということのポジティブ性ということをおっしゃっていただきましたけれども、これはどういう高校づくりというか中高一貫校づくりをするかによって、逆の場合もあり得て、逆の場合とはどういうことかということ、進学に極度にシフトすると、例えば高校2年生か1年生の終わり、2年生の夏休みぐらいまでに事実上カリキュラムを全部終了させるような形で受験体制に突入するというような、いわゆる都心の私学の中高一貫校がやるようなスタイルというものがこちらでもあり得るのかなという、感じがしました。

もう一つ、小学校の評価に関して保護者の目が非常に厳しくなっている。これは、私も小学生と中学生の子どもを持っておりますので、今回の二華中学校などのことになると、小学校5年生、6年生をお持ちの保護者の皆様の顔色が変わってきているのが分かります。つまり、これまでは、まあ割とのんびり小学校の通信簿というのは受け取っていたのが、これからは小学校の通信簿がかなり進路選択に大きな影響を与えるのではないかというような心配のもと、先生サイドからいうとプレッシャーがですね、厳しくなっていて、つまりそれまでは一小学校で完結していたような、「担任によって成績のつけ方がちょっと違うよね」くらいの不満だったのが、ここの小学校とあちらの小学校で基準が違くと、これはそういう中高一貫校への進学に非常に大きな影響を与えるのではないかというようなそういう問題が出てきていて、これは高校の推薦入学において各中学校の推薦の仕方に関する評価の統一性の問題とパラレルというか、それがまた小学校までおりてくるということで、その意味では教員サイドというか先生方からすると、かなり厳しい時代に入ってきているなという、そういう気がしています。つまり、中高一貫校の問題というのは意外とかなり宮城県の教育に関して思わぬ余波というか、それなりのインパクト、よいインパクトであることが非常に望ましいのですが、いろいろなことを副次的な効果として考えながら経過を見ていかなければならないのかなという気がいたしております。以上でございます。

荒井会長 あともう2分ぐらいですけれども、きょう総合学科に関してかなりのご意見をいただくことができました。日本に限らず、中等教育段階での職業教育というものと、それから進学制度教育をどういうふうに重ね合わせていけるかというのは、ほかの国においても大変頭を悩ませているところですが、北島先生にちょっとご示唆をいただきたいのですけれども、いわゆる職業教育の部分とそれから普通教育といいますが、普通教育から就職をしていく方た

ちも少なくないわけですがけれども、高校教育のあり方として、職業教育と普通教育をどういうふうに融合させていくことが可能なのか。現在のような要するに、今日は尾崎先生も早坂先生もおいでですがけれども、そういうそれぞれの分野ごとにディスクリットに組み立てていくのを、それを高校教育のところで統合していくといいますが、受け入れていくという形が望ましいのか、総合学科というのが一つの形ではあると思うのですがけれども、それ以外のまだ可能性といいますが、試みとしての可能性という部分を保証できるのか、そのあたりでもし何かご意見を承れればと思います。

北島委員 なかなか発言する機会がなく、聞き役になってしまいました。高校の現場から3人の校長が来ておりますけれども、私が普通教科で普通高校の、それから工業が専門の工業高校の校長先生、農業が専門の農業高校の校長先生というそれぞれの特色がありますけれども、今回の5県、または他県と比較した学科構成とかいろいろデータを大変興味深く見ておりました。

それで、今の議論の流れでお話いたしますと、総合学科はこれまでできた学校、それからこれからも多分増えていく、河南高校なんかも増えますけれども、それぞれの地域とそれぞれの学校が持っている特色があり、総合学科という学校のシステムをひとくくりでは語れないなというふうに思っております。当然、宮城野高校には宮城野高校の、迫桜には迫桜の、伊具、村田それぞれに特色があって、その中でまた類型も持っていますので、職業系の専門高校に近い教育と普通高校に近い教育と両方入っております。同じことは普通科というふうに、この65%でしょうか、この子どもたちが普通教育だけやっているのかというと、またそれも違うだろうというふうに思っております。この中に、学科とはいかないけれども職業系の選択科目とかそういうものもやっている学校、生徒たちもおります。当然、専門高校の方では普通科目もやっていて専門科目もやっている。そういう多様性というのでしょうか、先ほども一つの学校の中に多くの学科とか複合系が考えられないだろうかというふうなご発言もありましたけれども、これからもっとそういった部分が増えていく、または増やしていった方がいいのではないかと。確かに全県一学区になりますけれども、子どもたち、地域のニーズはやはり1時間ぐらいのところには多様な学びを欲しておりますし、かといって、これから次々とつくるというのは難しいでしょうから、現有財産を有効活用していく複合系のあり方というのでしょうか、そういうものを宮城は模索していかなければいけないのかなというふうに思っております。抽象的な言い方ではございますが、以上でございます。

荒井会長 尾崎先生からも一言。

尾崎委員 総合学科の就職の内定率は、普通科よりは上ですが、決して良いとは言えません。ということは、職業教育をやっていたとしても、それが多様化のニーズに合っているかどうかということが出てくるという捉え方を私はしております。

それから、専門高校と普通高校が連携して職業教育をやるということは、現実からいうと困難ではないかなと思っております。

荒井会長 早坂先生。

早坂委員 私は農業高校にいるわけですがけれども、現在、高校の進学率が98%というふうな中において、いろいろ今農業の問題もありますし、農業の出口の問題もありまして、農業高校は入りたい高校というわけではなくて、入れる高校というような形で入学する生徒が多い傾向にあります。ただ、本来、農業高校の果たさなければならない役割というものもあるわけですから、私の学校などは、入ってきてからそういうものをある程度区別して指導しないといけないということで、教育課程の中で普通教科と専門教科の選択を設けるといようなぎりぎりのところでやっている状態です。ある程度農業をやっていくといった場合には、大学とか大専校とかそういうところへ入って勉強する必要がありますので、そういうところに送り込むための学力をつけさせること、また一面として、就職する生徒も多いわけですから、そういう生徒に対しては資格取得とかそういうことで対応しなければならないところもありますので、教育課程の中でそういうふうにかなりダイナミックに工夫して対応していかなければならないなというふうに思っております。

荒井会長 私の進行の下手際で、すべての委員の先生方からご意見を頂戴するところまでいきませんでしたけれども、テーブルの上にございますご意見の記載用紙というのに、お考えいただいた部分をお書きいただいて、またファックス等で事務局の方にご連絡いただければというふうに思います。

ただ、大変充実した貴重なご意見を多数伺うことができまして、次回の審議会までに事務局の方で、議論、あるいはお寄せいただいた後からのペーパー等を参考にさせていただきます整理をしていきたいと思っております。

予定していた時間を数分オーバーしておりますけれども、たくさんのご意見ありがとうございました。こうした議論を重ねることで、今後の具体的な学校や学科のあり方について徐々に方向性が見えていくといいなと思っております。

それでは、本日はこの辺で審議を終了いたしたいと思っております。審議会の円滑な議事進行につきまして、ご協力をいただきましてありがとうございました。事務局にマイクをお返しします。

### 3 その他

司会 本日も大変短い時間の中で、ご熱心なご審議をいただきましてありがとうございました。今、会長からお話しございましたように、ご発言できなかったご意見がございましたら、ファックス、郵送、メールで事務局の方まで送付いただければと思います。

それから、次回でございますが、2月上旬を予定しておりますけれども、今後、会長と相談の上、改めて委員の皆様方にご連絡を申し上げたいと思いますので、よろしく願いいたします。

### 4 閉 会

司会 それでは、以上をもちまして、第4回県立高等学校将来構想審議会を終了させていただきます。ありがとうございました。